「ここは御国の何百里」を唄って下さったありし日のミキ先生

柳沢勝彦

今は亡きミキ先生の安らかなご冥福をお祈りいたします。

ミキ先生に始めてお会いしたのは、昭和四十二年の春、面接に行った時でした。

一年目は、事務を手伝いながら社会科を担当、淳風寮で食事をしながら当時の被服校舎二階の宿直室に泊めてもらい、鍵板をもって校舎、寮を巡回しておりました。

巡回中本校舎の校長室に灯りがついているので声をかけると、先生は「先にやすんで下さい。」といわれ、夜遅くまでいつも仕事をしておられました。

先生の朝は早く、朝寝坊の私に下から「かつひこさん」と声をかけられ、窓から鍵板を渡し受け取ってもらいま

した。

営繕係で夜中にストーブの修理をしていると、いつも「ごくろうさんですね」と声をかけていられましたが、寒中でも先生は火鉢で仕事をされていました。

裏の焼却炉を整理し、反古紙を集め売却するようになったのも、先生に物を大切にすることを教えていただいたからでした。

車の免許を取るため太田川岸の教習所へ通わせてもらい、試験を受け何回も落ちて、自信をなくしていた時に、「あなたは男でしょう。最後まで頑張んなさい」と元気つけられ、七回目に合格したときは、とても喜んでくださいました。

北海道の母が倒れたという知らせがあり、相談に行ったところ、先生は「飛行機ですぐ帰りなさい」といって旅費をカンパして下さったことは、今でも忘れられません。

上原に新寮が出来ましたので、先輩と入浴に行ったのですが、うっかりして上がる時に水とお湯を間違ってしまい火傷を負い、病院で手当てを受けると、先生は「住宅の離れでゆっくり治療をしなさい」と校長住宅の離れを貸して下さいました。

おかげさまで無事完治いたしました。

このご恩は生涯忘れません。

何年頃かは、思い出せませんが、秋だったと思います。ミキ先生と職員の方々と亀山の家へ手伝いに行ったことがあります。休憩時間にオニギリを食べたあと、ミキ先生を囲み「ここは御国の何百里……」とわらべ遊びをした

こと、迎えの車がこれなくてミキ先生と月明かりを頼りに、四方山話をしながらふもとまで歩いたことが懐かしく思い出されます。

新入生が入ってくると、学校の古いトラックでフトンを新寮へ運びます。校舎の角や根之谷川へ出る坂道が曲がり切れなくて車を壊したことがありますが、先生は「けがはありませんか、ご両親からお預りした大切な身体なんですから」と一度も怒られたことはなく、いつもやさしく温かい心で見守っていただきました。

何年か前になりますが、学校を訪れる機会があり、ミキ先生とお会いすることができ、新しい住宅に泊めて頂きました。先生は昔の住宅に住んでおられ、昔と少しも変わらないままで、当時の思い出を語ってくださいました。

流氷の訪れるこの北国に来てからも、先生にお便りをすると必ず返事を下さり、いつも最初は身体を大切にしなさいと書いてありました。

長女が生まれた時には、先生のお名前と同じ美樹とつけ、お知らせしたところとても喜こんで下さり、成長するまで先生の手づくりのものいろいろ送っていただき、心から感謝をしております。

私が干し柿が好きだということで、手づくりの干し柿を送っていただいたものです。

「為せばなる、為さねばならぬ何事も……」

ということを教えて下さったのも先生です。もう何年前になるのでしょうか。ミキ先生が北海道の研修旅行で、旭川市の近くの層雲峡温泉へ来られましたので、宿までお訪ねしお会いすることができて、とても感激をいたしました。帰りは、先生のバスを車で追いかける所でお別れしました。先生はバスが見えなくなるまで手をふっておられました。今でもそのお姿を忘れることは出来ません。

わずか六年間の学園生活でしたが、ミキ先生に教えていただいたこと、叱っていただいたこと、励ましていただいたこと……ミキ先生のご教訓は今でも忘れることはありません。

ふと思いめぐらしていると、元気な先生が昔のままで「ご両親は大切にしなさいよ。人間は健康が一番ですから、ガンバンなさい」と云われているような気がしてなりません。

先生ありがとうございました。

重ねて先生のご冥福をお祈りいたします。